審査講評

地産地消推進活動支援委員会委員長
山崎農業研究所事務局長　　小　泉　浩　郎

いのち輝く地産地消

農業・農村は、高齢化が進み、農業生産の担い手の不足、農地の遊休化等厳しい状況にあります。そのなかで地産地消は、右肩上がり、元気な活動が各地に展開しています。

第2回目である今回の表彰事業には、全国各地の活動の中から28点が推薦されてきました。いずれも甲乙つけがたい活動でした。推薦調書、必要な現地調査そして2回の審査会を開き、特に地域の個性を生かした創造的かつ将来性のある活動に重点をおいて審査を致しました。

消費者に支持され、地域から評価され、そして関係者の皆さんが元気なのはどうしてか、今回の審査の過程で、また、多くのことを学ぶことが出来ました。

1）出発は身近なことから

地産地消の成功には、用意周到、綿密な計画は、あまり重要ではないようです。若者がテントから始めた直売所、専業農家のビニールハウスのアイスクリーム製造、お母さんたちの無人店舗などは、思いつきや勢いで第一歩を踏み出しています。生産者と消費者が「顔が見え、話が出来る関係」で、お互いの満足を確認し、歩きながら改善しています。理屈の前に、とにかく、第一歩を踏み出すことの大切さを教えてくれました。

2）地域イメージを演出する

農業生産は何処へも持ち運べない風土を活かして営まれます。その固有の風土を農産物や加工品に物語として語らせる、それが地域イメージ、地域ブランドです。例えば「奥出雲」に歴史と文化を、「星の郷」に自然と空間を語らせています。

3）新しい価値の創造

近くに便利なスーパーマーケットがありながら、車で片道1.5時間、半日をかけたリピーター客がいる直売所があります。安さや美味しさ、鮮度や安全への評価もありますが、「誰々さんのトマト」は、消費者には、生産する人や場所そして作り方まで共有できる満足感が、また、生産者には、自分の作った農産物が、お客さんの食卓を飾り、喜んで食べてもらえる自信があります。そこには、ともに食べ物を通した「共感」が生まれ、時間やコスト以上の価値を認めています。

4）若い担い手の台頭

地産地消、その代表である直売所では、女性とお年寄りの元気が自慢の種で

す。その原点を守りながら、最近、若い担い手の台頭が目立ちます。農村レストランのシェフは兼業農家の長男です。農業体験のインストラクターは新規学卒者、漬物の店には、近隣団地の若奥さんが立ちます。若い人たちの自分を生かす格好の場となっています。

5）地産地消はプロ集団

地産地消は、1次産業から脱皮した6次産業です。1次産業、2次産業、3次産業それぞれにプロが必要であり、その総合力が活動の成否を決定します。農村は人材の宝庫です。売れ筋漬物は、おばあちゃんの秘伝でした。直売で年間1千万円の専業農家が生まれその後継者も育っています。兼業農家は、就業先では専門分野のプロ、その経験と能力が経理、販売、機械修理等に生かされています。趣味の絵画はイラストに、コンピューターはＰＯＳシステムの開発にと様々な場面で活躍されています。潜在能力が水を得た魚のように生き生きしています。

6）さらなる発展を

「食と農と環境」の保全は、いのちと暮らしの視点から生産者も消費者も、そして老後の生きがいや子どもたちの教育も含め、国民全体がかかわり合う重要な課題です。学校教育は、中央の教科書と都会に負けない施設や教材を用意することだけではありません。学校が立地するここだけしかない風土や資源を教材とし、暮らしや生き方を学ぶなかで、おばあちゃん達も立派な先生、子供たちから尊敬の眼が注がれます。また、地産地消（地域のものは地域で）からそのネットワーク化、さらに地産都商（地域のものを都会に）へと展開している事例もあります。その時でも発信源は、常に農業農村の現場にあります。

このところ「守りの農業」から「攻めの農業」が重要だという言葉を耳にします。輸出だけが「攻めの農業」ではありません。決められた栽培や出荷基準で、価格は市場が決める。これでは、「受け身の農業」です。消費者のニーズを読み、技術を磨き、自分で価格を決めて、消費者に手渡しながら消費者の評価を聞く。まさに地産地消は、「攻めの農業」です。受身でない主体的な地産地消活動は、農業者はもちろん消費者、地域住民、学校教育、一般企業等、関係する皆さんが輝いて見えます。農業・農村は、全体がいのちの営みのなかにあります。「多くのいのち」が人々も含めて、輝きを失いつつある時、「食と農と環境」を原点とする地産地消では、多くのいのちが輝いています。

【小泉浩郎（こいずみ こうろう）氏プロフィール】

1938年生　茨城県出身　東京教育大学農学部卒、農学博士（東大）、元農林水産省中国農業試験場長。専門は農業経営、産地形成、農村計画。

現在は、大日本農会：農芸委員、（財）日本特産農産物協会：地産地消推進活動支援委員会委員長。主な著書に「田園型社会の展望」共著（筑波書房）、「食料主権」編著（山崎農業研究所）、「水危機 ― 農からの発想」編著（山崎農業研究所）など。

地産地消推進活動支援委員会委員名簿

（敬称略）五十音順

委員長	小泉　浩郎	山崎農業研究所　事務局長
委員長代理	斎尾　恭子	愛国学園短期大学　講師
委員	牛島　正美	全国町村会　経済農林部長
委員	後沢　昭範	社団法人農林水産先端技術産業振興センター 参与
委員	千原（ちはら）　信彦	元日本農業新聞　論説委員
委員	二木（ふたつぎ）　季男	長野県農業大学校　非常勤講師
委員	山本　和子	農業マーケティング研究所　所長
委員	吉田　正一	ＪＡ甘楽富岡　車両施設事業本部次長